

論考

『山海經圖讚』のテキストについて

董

濤

はじめに

晉の郭璞は『山海經』に注釋を附した上で、『山海經圖讚』を作った。現行の『山海經圖讚』のテキストはおよそ九種類あり、次の表一のようにまとめられる。

表一の(二) 清・吳任臣の『山海經廣注』は讚を輯佚することを主目的として編まれたものではないが、『山海經』に對する注釋に圖讚の内容を大量に引用しているため、本稿の考察對象とする。

表一の他に明・張溥の『漢魏六朝百三集』⁽¹⁰⁾の『郭弘

『山海經圖讚』のテキストについて

表一 『山海經圖讚』テキスト一覧表

番號	時代	テキスト	略稱
(一)	明	『正統道藏』本 ⁽¹⁾	道藏本
(二)	明	沈士龍・胡震亨同校本 ⁽²⁾	沈本
(三)	清	吳任臣『山海經廣注』 ⁽³⁾	吳本
(四)	清	郝懿行輯本 ⁽⁴⁾	郝本
(五)	清	王謨輯本 ⁽⁵⁾	王本
(六)	清	錢熙祚輯本 ⁽⁶⁾	錢本
(七)	清	盧文弨輯本 ⁽⁷⁾	盧本
(八)	清	嚴可均輯本 ⁽⁸⁾	嚴本
(九)	現代	張宗祥整理本 ⁽⁹⁾	張本

『山海經圖讚』のテキストについて

二

農集』にも『山海經圖讚』（以後、略して百三家集本）が収録される。後述するように、百三家集本は、(三) 沈本をそのまま用いたもので、上記の一覧には入れないものとする。

『山海經圖讚』に關する近年の研究について述べると、佐竹保子「見果てぬ夢」郭璞『山海經圖讚』の敘法と認識⁽¹²⁾は道藏本のみに依據して圖讚を論じた。⁽¹¹⁾ 連鎮標『郭璞研究』は、中國における初めての郭璞研究の總合的著作であるが、圖讚についての論述は少なく、しかも嚴本のみを用いての研究であった。松浦史子『漢魏六朝における『山海經』の受容とその展開―神話の時空と文學・圖像―』⁽¹³⁾は、圖讚の複数のテキストに注目し、百三家集本と郝本、および嚴本を對校して研究を展開した。そのほか、『山海經』文獻を集成した『歷代山海經文獻集成』⁽¹⁴⁾には、道藏本・吳本・郝本・盧本が収録されているが、そのほかの版本は収録されなかった。管見の限り、『山海經圖讚』の諸テキストを網羅した研究はまだまだなく、まだ定本と言えるテキストもない。さらに各テキストにつ

いても、まだ校勘する餘地が残されているように思われる。現在、筆者は別稿で『山海經圖讚』校訂』を作成している。そこで本稿では、その校訂の所見にもとづいて、上記の九種類の『山海經圖讚』のテキストに解題を附しながら、その輯佚の概要と源流を考察してみたい。

一 明以前『山海經圖讚』傳承の概況

『山海經』は、中國およびアジアの古代の地理、博物に關わる書物である。前漢末の劉向・劉歆親子がそれまでの亂れていた寫本を整理して定本を作った後、一時注目を浴びたが、後漢以降、テキストも再び亂れ、注意されることも少なくなった。

後に詳しく述べるように、その後、晉・郭璞は『山海經』のテキストを整理し、約二萬字の注釋を附した上で、いくつかのテーマ別のまとまりを作り、『山海經圖讚』を作った。例えば、桂讚、迷穀讚などのように一つのテーマについて書いた讚もあり、祝荼草旋龜鴈魚讚、灌灌鳥赤鰭魚讚などのように複数のテーマについて書いた

讃もある。

清の學者畢沅は「亦た山海經圖の頗る古と異る有り。

秀(劉秀)又た之れに依りて説を爲す。即ち郭璞、張駿は見て讃を作りし者なり。」⁽¹⁵⁾と言ひ、『山海經圖讃』は『山海經』の經と圖に基づき作られたと主張した。長廣敏雄「山海經と畏獸圖」も「郭璞の時代に圖讃が存在したことは、『山海經』の圖畫が同時代に存在していたからにちがいない」と指摘する。⁽¹⁶⁾

梁・劉勰は、「讃は、明なり、助なり。昔虞舜の祀、樂正讃を重んずるは、蓋し唱發の辭なればなり」と主張し、讃が讀誦するための文體であることを強調した。

『山海經圖讃』の内容を見ると、讃はそれぞれ六句あり、各句は四字で、押韻してあり、讀誦するために作つたといえる。これにより郭璞が『山海經』をより廣く傳えようとした意識がうかがえる。

後世における書目の著録状況によると、『山海經圖讃』は二つの形で流布したことがわかる。一つは圖讃のみの單行本であり、もう一つは『山海經』の經文の後に圖讃

を挿入するという形である。

『隋書』經籍志、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志には「『山海經圖讃』一卷」と著録され、二卷の單行本が存在したことが分かる。通行の『崇文總目』には、「『山海經圖讃』二卷闕」と記録される。⁽¹⁸⁾『崇文總目』は北宋の初期に祕閣にあった本の書目及び解題であるが、現存する本は、南宋に搜書を目的として書名だけを抜き出して作られた改定本であり、「闕」字は、南宋の改定本作成の際に、祕閣から亡佚していたことを示す。⁽¹⁹⁾また、宋・吳棫の『韻補』⁽²⁰⁾の書目に『山海經贊』とあり、また『宋史』藝文志に、「『山海經讚』という書名で記載された例もある。南宋の『說郛』の地理類目録には、「郭璞『山海經圖讃』」と記載されるが、卷數の記録はない。

その後、明の『文淵閣書目』『千頃堂書目』では、どちらも單行本『山海經圖讃』の所在に言及するものではなく、ついに亡佚したと思われる。日本の場合、九世紀の藤原佐世撰『日本國見在書目録』に、『山海經贊』二卷と『山海經圖贊』一卷が記録される。⁽²²⁾

『山海經圖讚』のテキストについて

四

一方、『玉海』卷十五「地理類」所引の『中興書目』によると、「『山海經』十八卷、晉の郭璞傳、凡そ二十三篇、卷毎に讚有り。」²³と書かれ、各卷の末尾に讚を附した『山海經』のテキストがあったことが分かる。宋初の『太平御覽』の引書目録には『郭璞注山海經』のみが載せられているが、書中には圖讚が大量に引用されていることから見て、圖讚を伴うテキストを使ったのではないかと思われる。

以上の歴代目録の記載を踏まえた上で、現行の『山海經』の各テキストを見ると、最古と言われる宋の淳熙七年池陽郡齋刊本をはじめ、明の楊慎『山海經補注』、王崇慶『山海經釋義』まで、經文の後ろに讚を附けてはいない。讚を伴っているのは、明の道藏本だけである。

二 明清以來の『山海經圖讚』輯佚

明代から、『山海經』が再び注目されるようになって、楊慎の『山海經補注』、王崇慶『山海經釋義』など、新たな注釋書が次々と刊行された。また圖像に對しては、

蔣應鎬の『山海經（圖繪全像）』、胡文煥の『山海經圖』等が著された。²⁴しかし、これらの諸テキストは、郭璞の圖讚を載録していなかった。その後、復元の對象は、しだいに郭璞の讚にも及ぶこととなった。

清朝考證學の勃興により、明代の『山海經』研究は繼承され、圖讚についても、諸書所引の圖讚佚文を輯佚すること、その復元は更に進められた。

そこで以下では、各版本を解説しながら、輯佚の歴史の大略を説明する。

(一) 道藏本

圖讚は『正統道藏』竟字號の『山海經』（十八卷本）の各卷末に附録され、計二百五十九讚を存する。後に元の曹仲良の抄本が発見されるまで、道藏本は明清の學者たちの目にしうる唯一の版本であったと思われる。

しかし道藏本には、いくつかの問題がある。宋『中興書目』に「卷毎に讚有り」とあることを考えれば、讚はもとは十八卷全體に亘り附されていたはずである。しか

し道藏本には大荒東經以下の五卷は讃がない。その一方で、唐・宋の類書に引用された前三卷の圖讃の一部は、道藏本に含まれていないものもある。従って、その大荒經以前の部分も、郭璞の原本の流れを汲むテキストではなく、他から佚文を補ったのではないかと考えられている⁽²⁵⁾。そのため、『山海經』の内容ではないものが混入した例もある。例えば中山經の騰蛇讃について、『爾雅圖讃』の内容であるはずだと指摘している⁽²⁶⁾。嚴本もこの讃を削除して『爾雅圖讃』に移している⁽²⁷⁾。このように問題があり、また校勘が十分でない点も見受けられる。

もう一點は、讃の順番が現行の『山海經』經文と異なることである。それに對して、錢熙祚は「書を刊する者、故に顛倒を爲し、以て其の斷續の迹を泯くもす⁽²⁸⁾」と推測し、後人の再編成したものであると疑った。

以上の理由で、後世の學者たちは、圖讃を郭璞の原本に復するために、校勘と輯佚の努力をすることとなったといえる。

(二) 沈士龍・胡震亨の『山海經圖讃』二卷

『山海經圖讃』二卷は明・沈士龍と胡震亨の二人が共同で校正した。胡の序によると、「嘗て他書に従いて、其の『山海經』、『爾雅』等の讃を見るも、毎に全帙を得ざるを以て恨と爲す、壬寅の秋、趙田を過ぎるに、袁若思の案頭(つくえ)に此の讃有るを見、覺えず地を踏ふみて狂叫す、便ち若思従り、一昔の膏火を乞いて、自ら之れを録す。」と⁽²⁹⁾。當初は完本が存在を知らず、偶然友人の袁若思の机にその稿本を見つけ、喜びすぎて大聲で叫び、徹夜して書き寫したという。

胡・沈二氏は、この稿本を用い、また、宋の『太平御覽』などによって校勘を行ったと思われる。道藏本と比べて、沈本には「補遺」一卷の十四讃が増やされ、合計二百七十三讃となった。筆者がその補遺の内容を検討した限りでは、『藝文類聚』から十讃、『太平御覽』から四讃が確認された。しかしその中の鼯鼠讃・猩猩讃・欽冬讃・蟒蛇讃・枳首蛇讃の五讃は『爾雅圖讃』に屬すべきものである。

『山海經圖讚』のテキストについて

さらに、沈本の「補遺」巻の飛魚讚と鰐魚讚の殘文は、検討する餘地があると思われる。沈本の飛魚讚、道藏本卷五・(中山經圖讚)³⁰の馬腹獸飛魚讚とおよび中山經の經文、『太平御覽』卷九三九・鱗介部十一・飛魚條の引用文を並べてみると表二のようになる

表二 飛魚讚の内容比較表

沈本「補遺」巻の飛魚讚	飛魚如豚、赤文無羽。服之不雷、可以禦兵
道藏本馬腹獸飛魚讚	馬腹之物、人面似虎。飛魚如豚、赤文無羽。食之辟兵、不畏雷鼓
『山海經』經文	其中多飛魚、其狀如豚而赤文、服之不雷、可以禦兵
『太平御覽』鱗介部十一飛魚條	郭璞『山海經圖』飛魚讚曰…飛魚如豚、赤文無羽

こうしてみると、『太平御覽』の引用文は中山經圖讚の馬腹獸飛魚讚から取り出した二句であると思われる。飛魚讚という題も馬腹獸飛魚讚の省略と考えられる。そのうえで、沈本の飛魚讚を見てみると、『太平御覽』の引用文と『山海經』「中山經」の經文の一部である「服

之不畏雷、可以禦兵」をそのまま引用し、二者を合わせ「飛魚如豚、赤文無羽。服之不雷、可以禦兵」の飛魚讚を作ったのではないかと考えられる。そのため、沈本のみにある飛魚讚は、獨立した一つの讚としては成立しにくいといえるだろう。

同じく、鰐魚讚を比較してみると表三のようになる。

表三 鰐魚讚の内容比較表

沈本「補遺」巻の鰐魚讚	鰐之爲狀、半鳥半鱗。形如雞鯉、食之已疣
道藏本窋窋諸懷獸鰐魚肥遺蛇讚	窋窋諸懷、是則害人。鰐之爲狀、半鳥半鱗。肥遺之蛇、一頭兩身
『山海經』經文	其狀如鯉而雞足、食之已疣
『太平御覽』鱗介部十一鰐魚條	又『經圖讚』曰…鰐之爲狀、半鳥半鱗

ここでも沈本は、元々窋窋諸懷獸鰐魚肥遺蛇讚の一部である『太平御覽』の引用文「鰐之爲狀、半鳥半鱗」を、經文の「其狀如鯉而雞足、食之已疣」と合わせ、單獨の鰐魚讚「鰐之爲狀、半鳥半鱗。形如雞鯉、食之已疣」を

作ったのではないかと考えられる。

以上の點を踏まえれば、「補遺」として成立するのは、七讚しかないと思われる。

沈本は、胡・沈二氏同輯の叢書『祕冊彙函』に収録されている。その他、『函海』、『藝海珠塵』、『叢書集成初編』等も沈本を収録している。本稿では最初の『祕冊彙函』本の影印本を用いた。

ところで、「はじめに」で述べたように、明・張溥『漢魏六朝百三家集』の『郭弘農集』にも『山海經圖讚』が収録されている。これは『四庫全書』に収録されており、その圖讚テキストはよく世に知られている。筆者の對校によると、胡・沈二氏の序文の有無、印刷の誤字などを除けば、そのテキストは沈本と完全に一致している。沈本の特徴でもある補遺も百三家集本に含まれている。したがって、張溥は沈士龍らより後の人物であるから、⁽³²⁾明言はしていないものの、張溥は『百三家集』編纂の際に沈本を用いたものと考えられる。そのため、本稿では、百三家集本は、圖讚テキストの一つには数えなかった。

『山海經圖讚』のテキストについて

(三) 吳任臣の『山海經廣注』

康熙六年（一六六七）に刊行された『山海經廣注』は吳任臣が廣く文獻を涉獵して著した勞作である。吳任臣はその注釋の中に圖讚の佚文を大量に引用した。

注釋であるため、諸輯本の體例とはもちろん異なっており、經文に合わせて、讚が注に引かれている。また、注釋の内容によって、複数のテーマに亘る讚を分けてそれぞれのテーマに引いたり、また重複して使う場合もある。そのようなことを考慮しつつ集計すれば、『爾雅圖讚』とみなしうる内容も含めて、合計二百七十三讚ある。その中には、從來の輯本にはない大荒西經の神嘯讚の前四句「腳屬於頭、人面無手、厥號曰嘯、重黎所處」を輯佚している。

この注釋書は博大ではあるが、雜駁でもあるので、他の輯本と比べると校勘は精密とはいえない。例えば育陰谷讚の「炎霧是扇」の「霧」を「風」に作るような、道藏本や諸類書にも見えない字句は、吳本の誤寫だと推測される。このように、このテキストはまだ校勘の餘地

『山海經圖讚』のテキストについて

を残している。

(四) 郝懿行の『山海經圖讚』一卷

嘉慶十四年(一八〇九)揚州阮氏琅嬛僊館で刊行された郝懿行の『山海經箋疏』は、經文の後ろに郝懿行が輯佚した「圖讚」一卷を附録している。郝懿行の説明によると、明道藏本によって校訂し、臧庸の校正も併記したと述べる。⁽³³⁾

『山海經箋疏』は郝懿行の一生の精力を盡くした力作である。郝本の「圖讚」も、文字と内容が厳密に整えられている。郝本が新たに輯佚した佚文は、道藏本と比べて六讚ある。このうち、封豕讚・弱水讚・若木讚・蟬人國讚は沈本の「補遺」に含まれるが、沈本『補遺』に無いものとしては、『藝文類聚』と『太平御覽』から九尾狐讚・炎火山讚を増やしている。郝本は以上の六讚を経文の順番に従って圖讚の中に編入し、整理して計二百六十五讚とした。

(五) 王謨の『郭璞山海經圖讚』

嘉慶二十年(一八一五)に刊行された王謨の『漢唐地理書鈔』に、『郭璞山海經圖讚』が収録されている。王本は、吳任臣の『山海經廣注』から圖讚の内容を摘出して底本とし、また『藝文類聚』、『太平御覽』、唐・顔師古の『匡謬正俗』、明・張自烈が編集した辭書『正字通』の引用文と對校してできた校本である。前人より、佚文搜索の規模を擴大したが、しかし王本には、他本と比べると、明らかな缺點がいくつかある。

まず、吳本以外の「圖讚」の版本を對照しなかったこと。王謨は道藏本と沈本の存在を全く知らず、對校の資料が類書所引の文だけに限られ、各類書に無い部分は吳本を丸寫することしかできなかったのである。そのため、さまざまな問題を生じた。

例えば吳本は南山經の祝茶草旋龜鷓鴣鳥讚の内容を分けて祝茶と鷓鴣の注釋とした。それは注釋として問題はなかったが、王謨はそれを判別できなかったため、祝茶讚と鷓鴣讚の二つの讚に分けて記載した。⁽³⁴⁾同様な例は多

く見られる。

その他、吳本の注釋に引用された楊慎の『異魚圖讚』の内容を、誤って「何羅魚之讚」として北山經圖讚に入れた⁽³⁵⁾。また、瑾瑜玉讚を二度、重複記入するなど、編集上の誤りが多かった。

(六) 錢熙祚の『山海經讚』

道光二十六年(一八四六)、文獻學者錢熙祚の死後二年、息子の培讓・培傑により彼が生前に主編した『指海』二十集が刊行された。『指海』の十八集に、錢熙祚が輯佚した『爾雅讚』と『山海經讚』が収録されている。錢本は精密で謹直な性格をもつ力作といえる。奥書に、道藏本を底本にし、吳本と對校したと明記されている。⁽³⁷⁾その對校に用いた書籍は『藝文類聚』、『太平御覽』以外にも『廣雅』、『水經注』、『北堂書鈔』、『初學記』にまで擴大し、また、『匡謬正俗』によって、韻の校勘もし、畢方讚の「火不炎正」を「火不炎上」に直した。⁽³⁸⁾諸本の中、もっとも廣い範圍の考證がなされているといえる。

『山海經圖讚』のテキストについて

また、讚の順番を経文により調整した上、改修した箇所案語をつけ、その由來を説明した。内容については、上記の沈本の補遺卷の鰐魚讚と翡翠讚、⁽³⁹⁾吳本の朝鮮讚、神噓讚のようなテキスト上で検討する餘地のある内容は、錢本に採用されなかった。

諸類書の『爾雅圖讚』の内容を排除したうえ、錢本は郭璞の注釋文に引用された銘の詞を讚に入れ、⁽⁴⁰⁾さらに『北堂書鈔』から東海外大壑讚を増やし、合計二百六十八讚を輯佚した。

(七) 盧文弨の『山海經圖讚』一卷

光緒十五年(一八八九)に刊行された盧文弨の『抱經堂叢書』の群書拾補には『山海經圖讚』一卷が収録されている。盧文弨の説明によると、對校のテキストは吳本、道藏本と百三家集本である。⁽⁴¹⁾

盧本における讚の順番は道藏本のままである。けれども「補遺」の部分は四十四讚に増やし、合計は三百三讚がある。筆者の考察によると、その百三家集本及び沈本

『山海經圖讚』のテキストについて

と比べて多い分の三十讚はすべて『藝文類聚』から抽出された『爾雅圖讚』の内容である。

(八) 嚴可均の『山海經圖讚』二卷

嚴可均が編集した『全上古三代秦漢三國六朝文』の『全晉文』巻百二十一、百二十三に『山海經圖讚』二巻が収録されている。本叢書は嚴可均の生前には刊行は果たせず、光緒十三年(一八八七)にようやく刊行された。⁽⁴²⁾

嚴可均の序によると、『隋書』と『舊唐書』『新唐書』の記述により『山海經圖讚』を二巻に分けた。また現行の『山海經』經文の順番に従って讚の順番を再編成し、⁽⁴³⁾道藏本を底本として、諸類書と郭璞の注釋文に引用された讚と類似する銘詞などを廣く参照して校勘した。さらに、引用の典故も記録された。編集の性格は、錢本とよく似ている力作である。

諸類書から輯佚した六十七讚を道藏本に補足し、元からあった『爾雅圖讚』の内容を省いて、計二百六十六讚を収録する。⁽⁴⁵⁾

(九) 張宗祥の『足本山海經圖讚』一卷

張本は現代の書誌學者である張宗祥が元・曹仲良の抄本『山海經圖讚』により整理したものである。張氏の奥書によると、乙亥年(一九三五)に故宮博物院の收藏品である抄本を書き寫した。その由來について、張氏は、「首葉に題署して『山海經に讚有り。元の曹仲良手抄す。明の姚公綬・王元美・陳眉公家藏す。崇禎乙亥六月董其昌書す。』と爲す、流傳して清に至り、遂に内府に入る。」⁽⁴⁶⁾と述べる。

また、抄本の「崐山讚」の「殷」字の末筆を缺くことから、その底本は宋本であると判断した。⁽⁴⁸⁾

張氏は「經文、通行の嚴郝刊本と校するに異同頗る少なし。獨り讚語のみ相い去ること徑庭あり。」⁽⁴⁹⁾と述べた。

この抄本は『山海經』經文と圖讚兩方の内容を備えていた。つまり圖讚のみの單行本ではなく、道藏本のような經文の後に圖讚を挿入するという形だと思われる。

表一の(二)沈本から(八)嚴本までのテキストは、基本的に(一)道藏本及び諸類書所引の佚文に基づく校

本と言える。これら従来のテキストと違い、張本には、道藏本にはない五卷分、つまり大荒東經六讚、大荒南經七讚、大荒西經十二讚、大荒北經九讚、海內經十五讚が含まれている。山經の部分も、道藏本とは若干違いがある。總數が道藏本より大幅に多く、計三百三讚がある。

その内容の違いをまとめると左記の表のとおりになる。表四に挙げられていない南山經・西山經・北山經・東山經・海外南經・海外西經・海外北經・海外東經・海內南經・海內西經・海內北經・海內東經については、張本と張本以前のテキストのいずれにも同じ讚がある(表五)

表四 張本以前のテキストと張本の比較表

(●は、張本だけにある讚。○は、張本にはないが張本以前のテキストにはある讚。▲は、張本以前のテキストでは残缺した讚を張本で補足できるもの。◎は、道藏本より後の輯本で輯佚した讚で、張本と一致するもの。)

卷	内 容
北山經	○嶺
中山經	●欄木、◎鬼草、●豪魚飛魚、●磨犀渠獺、●陽虛山、●馱鳥鵠鸚鳥、○蛟、○神耕父、○九鐘、○嬰勺、○獫狫、○狙如、○梁渠移即聞獫狫獸駘餘鳥、○神于兒、○神二女、○飛蛇。
大荒東經	▲東海外大壑、▲殪人、●中容國木食、●司幽國、●應龍、●夔
大荒南經	●雙雙、●蒼梧之野舜與叔均葬、●汜天山至山玄地四方淵、●蜮民國、●因乎舜壇淵楓木、●欒木白淵、●羲和國
大荒西經	●不周共工、●有神人十、●太子長琴靈山羣巫、●沃民、●鳴鳥神奄茲、●白丹赤丹、▲神噓、●天犬、◎弱水、◎炎火山、●壽麻國、●三面人
大荒北經	●肅慎國、●附隅丘舜竹林琴蟲、●青蛇檠木猎猎丹山神九鳳、●强梁、●黃帝女妖、●赤水女子獻、●犬戎、●無骨子、◎若木
海內經	●朝鮮、●有鳥山三水、●柘高、◎都廣野、●蜺蛭、◎封豕、●延維、●五采鳥鵩鳥相顧之尸、●幽都玄丘、●赤脰民、●釘靈民、●爰仲、●盤爲弓矢、●帝舜賜羿彤弓素燭、●魋竊帝息壤、○翡翠

『山海經圖讚』のテキストについて

表五 各輯本の讚數集計表

張本	嚴本	盧本	錢本	王本	郝本	吳本	沈本	道藏本	
24	24	24	24	28	24	24	24	24	南山經
53	53	53	54	54	53	53	53	53	西山經
29	30	30	30	33	30	30	30	30	北山經
18	18	18	18	18	18	18	18	18	東山經
45	49	49	50	49	49	49	49	49	中山經
16	16	16	16	16	16	16	16	16	海外南經
16	16	16	16	16	16	16	16	16	海外西經
15	15	15	15	16	15	16	15	15	海外北經
8	8	8	8	8	8	8	8	8	海外東經
6	6	6	6	5	6	5	6	6	海內南經
11	11	11	11	11	11	11	11	11	海內西經
9	9	9	9	10	9	10	9	9	海內北經
4	4	4	4	4	4	4	4	4	海內東經
6	2	0	2	3	2	3	0	0	大荒東經
7	0	0	0	0	0	0	0	0	大荒南經
12	2	0	2	4	2	4	0	0	大荒西經
9	1	0	1	1	2	1	0	0	大荒北經
15	2	0	2	6	0	5	0	0	海內經
		44					14		補遺
303	266	303	268	282	265	273	273	259	合計

参照。

以上の點から、張本はそれまで明清の學者の目に届かなかつた新たなテキストを提供したと言える。その一方で、表で示した通り、從來の輯本に載録された佚文で、

張本にないものが、十二讚あり、これを張本と合わせる
と合計三百十五讚を得ることができる。

数だけではなく、それまで讚の字句に殘缺があり不完全であつた東海外大壑讚・蜉人讚・神噓讚なども、この

抄本によって補足できた。⁽⁵¹⁾

張本の本文の後には嚴本・郝本と對校した校勘記を附録として附けている。各讚の字句については、張氏によると、曹仲良の抄本が道藏本より適切な箇所は二十二箇所あり、道藏本に及ばない所は十六箇所あるという。⁽⁵²⁾ただし筆者の考察によると、張氏の校訂もまだ検討する餘地がある。例えば張氏は、曹仲良の抄本が「色」をよく「邑」にするのは抄本の誤りであると指摘したが、⁽⁵³⁾張本の酸與讚⁽⁵⁴⁾「見則色恐」の場合、經文「見則其邑有恐」⁽⁵⁵⁾という表現があるため、「色」に作っているのは誤りである。

また、張本の三百三讚の内、豪魚飛魚讚は『太平御覽』の引用文に「張駿山海經飛魚讚」とされているので、張駿の作の可能性がある。飛蛇讚について、『藝文類聚』には騰蛇讚とし、内容は『爾雅』に近いので、『爾雅圖讚』に属するべきだと思われる。

以上、ここまでの解題を踏まえれば、明清以來、近代までの各テキストの讚の数は、前頁の表のとおり整理で

きる。

おわりに

道藏本以後の明清輯本は、搜索の規模、考證の粗密の差があるが、王本以外、道藏本由來のテキストを底本とし、補うに類書にある佚文を利用する点においては、同じである。各輯本の搜索範圍は、『藝文類聚』、『太平御覽』、また『初學記』、『北堂書鈔』、『廣雅』、『水經注』、『匡謬正俗』、『正字通』へとしだいに擴大したが、これが當時利用できる文獻の限界であったと考えられる。郝懿行、錢熙祚、嚴可均の輯本に至る時点でも、大荒經以降は數讚しか補足できず、東海外大壑讚、蜉人讚、神噓讚などは殘缺のままであることがわかる。元の曹仲良の抄本が世に現れてから、その状況が大きく變わり、新たな佚文が多く見つけた。しかし曹仲良の抄本を校訂した張本にも問題が含まれていた。

本稿では、上記の九種類のテキストを合わせて検討し、張本の三百三讚と從來のテキストからの十二讚を合わせ

『山海經圖讚』のテキストについて

て計三百十五讚を輯佚できた。さらにその中から張駿の作品の可能性が高い「豪魚飛魚讚」と「爾雅圖讚」に属するべき「飛蛇讚」を削除することで、最終的に『山海經圖讚』三百十三讚が郭璞の『山海經圖讚』に最も近い姿であると結論附けることが出来た。

これからこの三百十三讚を起點とし、張本及び各輯本のテキスト、さらに各類書の佚文とも合わせて総合的に検討することで、校訂本『山海經圖讚』の完成に繋げた。

註

- (1) 『正統道藏』山海經、臺北藝文印書館、一九七七、涵芬樓本影印、二九〇四一―二九一三五頁。
- (2) 沈士龍・胡震亨同校『山海經圖贊(及其他三種)』山海經圖贊、(中華書局、一九九一)。
- (3) 吳任臣『山海經廣注』、康熙六年(一六六七)刊本。
- (4) 郝懿行『山海經箋疏』山海經圖贊一卷(巴蜀書社、一九八五)。
- (5) 王謨『漢唐地理書鈔』郭璞山海經圖贊(中華書局、一九六一) 六二―八七頁。
- (6) 錢熙祚『指海』山海經讚、(大東書局、道光中刊本影印)。
- (7) 盧文昭『抱經堂叢書』群書拾補、山海經圖贊(直隸書局、一九二三)。
- (8) 嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』全晉文、山海經圖贊(中華書局、一九五八) 二一五八―二一七一頁。
- (9) 張宗祥校錄『足本山海經圖贊』(古典文學出版社、一九五八)。
- (10) 『欽定四庫全書』集部第三百五十一―三百五十五(臺灣商務印書館文淵閣本影印) 第一千四百十二―一千四百十六冊。
- (11) 佐竹保子「見果てぬ夢―郭璞『山海經圖讚』の敘法と認識」(『東洋古典學研究』(九)、二〇〇〇、〇五) 六六―八一頁。
- (12) 連鎮標『郭璞研究』(上海三聯書店、二〇〇二)。
- (13) 松浦史子「漢魏六朝における『山海經』の受容とその展開―神話の時空と文學・圖像―」(汲古書院、二〇一二)。
- (14) 文清閣『歷代山海經文獻集成』(西安地圖出版社、二〇〇六)。
- (15) 「亦有山海經圖、頗與古異。秀又依之爲說、即郭璞張駿見而作讚者。」畢沅『山海經』(上海古籍出版社、一九八九) 一頁。

- (16) 長廣敏雄『六朝時代美術の研究』増補版(朋友書店、二〇一〇)一一二頁。
- (17) 「贊者、明也、助也。昔虞舜之祀、樂正重贊、蓋唱發之辭也。」劉勰著・范文瀾注『文心雕龍注』卷二・頌讚(商務印書館、一九七五)一五八頁。
- (18) 王堯臣等編次『崇文總目』、王雲五等主編『國學基本叢書四百種』(臺灣商務印書館、一九六八)、八七頁。
- (19) 『崇文總目』各版本の相違の考察については、曾谷佳光『崇文總目』―その編纂から朱彝尊舊藏抄本に至るまで(二)松學舎大學人文論叢』第六八輯、二〇〇二年一月、一六一―一六三頁)を参照されたい。
- (20) 吳棫『宋本韻補』(中華書局、一九八七)二頁。
- (21) 『宋史』卷二百四(中華書局、一九七七)五一五四頁。
- (22) 藤原佐世『日本國見在書目錄』、黎庶昌『古逸叢書』(江蘇廣陵古籍刻印社、一九九〇)七四四頁。
- (23) 「山海經十八卷、晉郭璞傳、凡二十三篇、每卷有讚。」『玉海』卷十五、王應麟(江蘇古籍出版社、一九八七)。
- (24) 馬昌儀『古本山海經圖說』(山東畫報出版社、二〇〇一)十一二頁。
- (25) 「故有疑藏本之贊非景純原本、乃後人雜合而成者。」山海經贊跋、注(6)前掲書同。
- (26) 「近丁小山又謂「中山經之太室・騰蛇二贊係爾雅贊誤入。」山海經贊跋、注(6)前掲書同。
- (27) 嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』全晉文、爾雅圖讚(中華書局、一九五八)二二五六頁。
- (28) 「刊書者故爲顛倒、以泯其斷續之迹。」注(6)前掲書同。
- (29) 「嘗從他書見其山海經爾雅等讚、每以不得全帙爲恨。壬寅秋、過趙田袁若思案頭見有此讚、不覺踴地狂叫、便從若思乞一昔膏火自錄之。」注(2)前掲書五頁。
- (30) 道藏本は卷一、四末尾の圖讚部分にはそれぞれ「南山經圖讚」「西山經圖讚」「北山經圖讚」「東山經圖讚」と題すが、中山經のみは題を缺く。いま他卷の體例に倣い「中山經圖讚」と呼んでおく。
- (31) 道藏本は「羊鱗黑文」に作り、張本は「雞足鯉鱗」に作る。
- (32) 『明史』卷二八八・文苑傳四・張溥傳によれば、張溥は崇禎十四年(一六四一)に四十歳で卒したとあり、胡震亨らが袁若思の『山海經圖讚』を抄寫した萬曆壬寅年(一六〇二)に張溥は生まれている。
- (33) 「……案今本竝無圖讚、唯明藏經本有之、茲據補。其文字舛誤、今略訂正。及臧氏校正竝著之、疑則闕焉。」注(4)前掲書同。
- (34) 注(5)前掲書六二、六三頁。
- (35) 注(5)前掲書七〇頁。
- (36) 注(5)前掲書六六、六八頁。
- (37) 山海經讚跋、注(6)前掲書。

『山海經圖讚』のテキストについて

- (38) 注(6)前掲書十一頁。
- (39) 『山海經』と『爾雅』兩方とも翡翠の記事があるので、沈本の翡翠讚はどちらに屬すべきかは判然としない。
- (40) 西山經窮奇讚、注(6)前掲書十三頁。
- (41) 『晉郭璞注山海經并作圖讚……吾鄉吳志伊先生作廣注、多附見而不全。唯道藏本全載於經注之後、與經文時有異同。今各如其文錄之、以明刻郭弘農集相參校。後有刻山海經者、必并刻方成全書。』注(7)前掲書一頁。
- (42) 重校本沈乾一序、注(8)前掲書一頁。
- (43) 「依經文先後編次之、仍依隋唐志分爲二卷。」注(8)前掲書二一五八頁。讚の順序を入れ替えた例としては、例えば道藏本では、祝荼草旋龜鰐魚讚は、迷穀讚の後に置かれているが、嚴本では、經文に従い、迷穀讚の前に置かれている。
- (44) 銘詞(銘)と讚の関係については、注(8)前掲書二一五八頁の序、および注(6)前掲書「山海經贊跋」第一葉を参照されたい。ただ、兩者も既に指摘するように、贊と銘詞は一致する場合もあれば、大きく異なる場合もあるなど、その関係は複雑なので、別稿にて改めて検討したい。
- (45) 「今從各書寫出六十七篇、益以藏本、共得二百六十六篇。」注(8)前掲書二一五八頁。
- (46) 「首葉題署爲『山海經有贊、元曹仲良手抄、明姚公綬王元美陳眉公家藏、崇禎乙亥六月董其昌書。』流傳至清、遂入內府。」張宗祥校錄『足本山海經圖贊』注(9)前掲書五七頁。
- (47) 宋太祖の父、趙弘殷の諱である。陳垣『史諱舉例』(上海書店、一九九七)一一三頁。
- (48) 「崂山贊殷字缺筆、知曹氏所書據宋本。」注(9)前掲書五七頁。
- (49) 「經文校通行嚴郝刊本異同頗少、獨讚語相去徑庭。」注(9)前掲書五七頁。
- (50) 讚題・讚文に多少の文字の異同はあるが、全體的に内容はおおむね一致する。ただし、後述する東海外大壑讚・崂人讚・神嘯讚の三讚は、從來のテキストでは殘缺していた數句が、張本に残っている(注(51)参照)。
- (51) 例えば東海外大壑讚について、嚴本は『北堂書鈔』卷一百五十八により「雁益洞穴、映昏龍燭。爰有大壑、號曰底谷。」の四句を輯佚するが、張本には、續けて「流宗所灌、豁然滲漉。」の二句があり、從來のテキストを補足できる。
- (52) 「字句異同、互有得失。如膺政而出膺作應……此皆寫本之善者也。如兼多作魚……此皆寫本之誤、不可從者也。」注(9)前掲書五六、五七頁。
- (53) 「如兼多作魚……色多作邑……此皆寫本之誤、不可從者也。」注(9)前掲書五七頁。

(54) 「景山有鳥、稟形如類。厥狀委蛇、脚三翼四。見則色恐、食之不醉。」注(9)前掲書十八頁。

(55) 「又南三百里、曰景山……有鳥焉、其狀如蛇、而四翼、六目、三足、名曰酸與。其鳴自談、見則其邑有恐。」注(1)前掲書二六〇七一頁。

〔附記〕

小稿を執筆するに当たり、筆者は張本の底本である元曹仲良の抄本を探すために、臺灣故宮博物院圖書文獻館データベース (<http://tech2.npm.edu.tw/museum/index.aspx?lang=zh-tw>) を確認したが、その所在は判然としなかった。しかし、小稿の校了直前に、臺灣故宮博物院の「書畫典藏資料檢索系統」データベース (<http://painting.npm.gov.tw/>) に、「元曹善書山海經」として原本畫像が公開されていることに気が附いた。そのため、小稿の検討では、曹仲良抄本の原本は検討範囲に含めていない。筆者の不明を恥じつつ、曹仲良抄本の検討を今後の課題としたい。

執筆 者 紹 介

董 濤 大阪府立大學博士後期課程二年

石 井 公 成 駒澤大學佛教學部教授

張 麗 山 浙江理工大學講師

水 野 杏 紀 關西醫療大學非常勤講師

二ノ宮 聰 關西大學非常勤講師